

| | |
|---------|---------------------------------------|
| 氏名 | UMETBAEVA KALYIMAN |
| ヨミガナ | ウメバ ^エ リ カマン |
| 学位の種類 | 博士（音楽学） |
| 学位記番号 | 博音第244号 |
| 学位授与年月日 | 平成26年3月25日 |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉 クルグズ共和国におけるコムズの変遷－民俗楽器から国のシンボルへ－ |

論文等審査委員

| | | | | |
|------|--------|------|--------|-------|
| (主査) | 東京藝術大学 | 教授 | (音楽学部) | 植村 幸生 |
| (副査) | 東京藝術大学 | 教授 | (音楽学部) | 塚原 康子 |
| (副査) | 東京藝術大学 | 教授 | (音楽学部) | 西岡 龍彦 |
| (副査) | 宮城教育大学 | 名誉教授 | | 森田 稔 |

(論文内容の要旨)

楽器はなぜ変化するのか。変化を誘うものの根底には何があるのか。楽器の変化とは単に変化を指し示す言葉ではない。それは人間の帰属する社会背景をも映し出す、一種の社会的現象なのである。

本論文では、コムズを研究の中心とする。コムズとは、クルグズを代表する国民的な三弦楽器である。旧ソヴィエト社会主義共和国連邦時代から現在に至るまで、コムズは大きな変化にさらされてきた。本研究では、ソ連時代から現在までのコムズの変遷について、楽器の構造やそのレパートリー、演奏技法、教育などに焦点を当て、伝統的なコムズと改良されたコムズがクルグズにおいてどのような状況にあるのか、特に教育機関の中でどのように教授されているのかについて、伝統型と改良型コムズとの比較により考察した。また、伝統型コムズと改良型コムズの楽器が併存している現況を踏まえ、ソ連時代に改良型コムズが作られるようになった経緯、そしてソ連崩壊後にはそれが廃れ、今日の伝統型コムズが優勢になるまでの経緯を明らかにした。その上で、コムズの楽器そのものとその音楽がどのように変遷したのかを、音楽的・社会的背景から検討することを目的とした。

コムズとその音楽の変遷は、三つの時代に分けられる。それは伝統型コムズしかなかった時代（ソ連成立以前）、改良型コムズが誕生し、教育機関などで登場した時代（1930～1991年）、そしてソ連が崩壊し改良型コムズは廃れてしまったが、その一方で伝統的なコムズが人気を集める時代（1991年以降）である。本論文ではソ連成立前後の時期から現在に至るまでの期間を対象とする。

本論文は序論と5章から成り立つ。

第1章「クルグズ共和国」では、本論文全体の予備考察として国の名称、地理、宗教、クルグズ語など、クルグズ共和国について詳述した。第2章では、三つの文献に基づいてクルグズ民族楽器分類表の分析を試みた。これらの表に取り上げられている楽器のほとんどはソ連時代に廃れ、現在演奏されなくなったものが多い。さらに、これらの表の中の一つには、ソ連時代に改良された楽器も含まれている。したがって、ソ連時代に改良された楽器はクルグズ人に受容され、時間が経つに連れて「クルグズ民族楽器」と思われるようになったことを指摘した。

第3章では伝統型コムズとコムズ奏者を取り上げた。とりわけこの章では、即興で歌を歌い、コムズを演奏するアクヌ (акун, акын) と二人以上のアクヌ間での言葉の掛け合いを意味するアイトゥシュ (aitysh, айтыш) と呼ばれるジャンルについても述べた。それらはソ連成立以前にはクルグズ民族文化の中心であった。しかしソ連成立以降、西洋的な「プロ」の音楽家の概念が広まると、音楽概念は細分化され、アクヌはコムズ奏者、歌手、作曲家などといった概念へと枝分かれしていった。この変化によって、アクヌ技芸とアイトゥシュは廃れてしまい、新たな音楽家が誕生した。

第4章では、改良型コムズについて述べた。本論文執筆に際し、改良型コムズの現状を明らかにするため、筆者は2011年にクルグズの首都ビシケクのクレンケエヴァ（Kurenkeeva, Куренкеева）音楽専門学校で調査を行った。ここで行われた楽器の学科試験から改良型コムズの現状を踏まえた上で、コムズが改良された時代の背景、改良の目的とその方法を探った。また、今回の調査では、ソ連の崩壊後から現在に至るまでのこの22年間に改良されたコムズは次第に姿を消し、逆に伝統的なコムズが積極的に演奏されるようになってきたことが分かった。第5章では、その理由を2011～2012年に現地で行ったコムズの教員、製作者、演奏家などコムズに携わる人物のインタビューを通して明らかにした。

以上の考察過程から、ソヴィエト社会主義共和国連邦の一部であったクルグズ共和国のコムズを例に、ソ連諸国全土で行われた西洋文化の浸透の経緯や、ソ連時代に行われた楽器の改良とその現状を分析した。さらにソ連諸国であったカザフスタンとトゥヴァ共和国の事例を取り上げ、これらの国で行われた楽器改良の経緯や、その特徴と結果から、20世紀に世界中で行われた民族音楽文化の西洋化において、ソ連圏の音楽文化がどのように位置づけられるかを考察した。

（総合審査結果の要旨）

本論文はクルグズ（キルギス）共和国を代表する撥弦楽器コムズの近現代における変遷史を、ソ連時代をはさむ三期に分けて明らかにするものである。とりわけ、「伝統型」コムズとソ連時代に生まれた「改良型」コムズとを対比し、前者がソ連崩壊後に復権を果たす一方で、後者が事実上駆逐された状況とその意味の解明を試みている。世界的にも数少ないクルグズ音楽に関するモノグラフである。

本論は五章からなる。クルグズの国情を概観する第一章、同国における「民族楽器」とその概念の変遷を論じる第二章につづき、第三章ではコムズの「伝統的」様相を詳しく説明する。コムズ音楽の口頭性と身体動作、職業音楽家アクヌが果たした役割と彼らの主要なレパートリーであるアトゥイシュ（対話的・競争的な歌の掛け合い）の伝承などが論じられる。第四章ではソ連時代「改良型」コムズの成立過程とその現況を論じる。コムズの改良は1930年代と1950年代初頭の二回にわたり、おそらくはバラライカをモデルに進められたこと、その契機は民族楽器オーケストラの成立にあること、現在なおクルグズ国内の音楽学校で「改良型」が細々と教えられていること、クルグズにおける楽器改良過程は隣国カザフスタンのそれと酷似することなどを新たに明らかにした。第五章ではソ連崩壊後における「伝統型」コムズの復活の状況を論じる。「伝統型」コムズはクルグズ人の精神的な拠り所として今日熱心に学ばれ、演奏されている。しかし執筆者は、「伝統型」コムズがソ連以前の伝統コムズそのものとはいえないと主張する。すでに西洋音楽のリテラシーや上演の習慣を身につけた現代の演奏家たちが、それにあつた楽器を要求しているからである。またコムズ以外の楽器の改良はソ連崩壊後も継続されているなど、必ずしも体制変化だけに起因しない楽器の変容が認められることも本章で同時に明らかにした。

本研究はクルグズにおける民族文化の劇的な変化の様相を、コムズを事例に巧みに描き出している。とりわけコムズ演奏家、教育者、楽器製作者など八名の関係者に対するインタビューは、本論の主たる論拠となっただけでなく今後の研究にも資する重要な記録として、本論文で最も成功した部分である。

本研究が、旧ソ連をはじめポスト社会主義状況における伝統文化の変容というテーマに関わることは言うまでもない。このテーマはきわめて多岐にわたる論点を含むが、そのなかで、本論文において十分に論及・展開されなかったもの（たとえば、社会主義体制下における伝統文化の維持とその後の復興との関係、メディアとの関連、新旧政府の文化・宗教政策、等々）があることは否定できない。また、議論を集約させて緊密な構成に仕上げるという面でも、いまひとつ及ばない点があつた。しかしながら、それらは本研究の価値を大きく損ねる欠点ではなく、むしろ今後の研究の進展を促すものでもある。高い問題意識のもと、周到に行われた調査に基づき、執筆者にとっては第三言語である日本語で、丹念に書かれた本論文は、博士学位に値する研究成果であると認め、合格とする。